平成26年(2014)
阿づまの光
11月号・Novembro

題字出口直日
通巻第548号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 浅田秋彦
〒110-0008
東京都台東区池之端2-1-44
TEL 03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
振替 00160-5-72625
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

五代教主作 灰釉茶盌 銘「元屋敷」
[元屋敷土+元屋敷松釉]

今月の聖言

大本の無二のたからは遠近(おちこち)に
道つたへ行く宣伝使なる

出口王仁三郎聖師

休みの日には

祭務課長 髙野春樹(たかのはるき)

11月ともなりますと、朝晩肌寒く感じ、長く歩いてもそれほど汗もかかなくなり、散歩に良い季節です。

東京本部から不忍通りを北へ向かうと、根津、千駄木という文京区の地域があり、そこから東に入ると台東区谷中(やなか)があります。この辺りは戦災に遭わなかったことから、古い町並みや入り組んだ路地が残っており、新旧織り交ざった雰囲気がとても気に入っています。

「谷中銀座」はすぐに通り過ぎてしまうほどの短い通りですが、屋根の上に猫の置物が乗っていたり、本物の猫に出会えたりします。突き当りの階段を越えてしばらく行くと、日暮里駅です。高層の建物がいくつかそびえ、「舎人(とねり)ライナー」という自動制御の電車が頭の上を走っていて、雰囲気が一変するギャップを楽しんでいます。また、駅裏(南側)には谷中墓地が広がっていて、夜は結構スリルがあります。

そこから北へ行くと西日暮里駅があり、飲食店がたくさん並んでいます。反対の南へ向かうと、鶯谷駅です。そこから上野の森に戻る途中、美術館、博物館や寺院が多くあり、静かな落ち着いた雰囲気が味わえます。

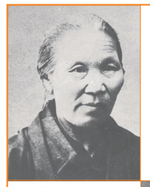
時間のある休日には何度か遠出もしました。東は浅草、スカイツリーを越えて葛飾柴又へ。西は九段、新宿を過ぎて荻窪界隈へ。北は埼玉の草加や川口へ。南は神奈川の川崎まで足を延ばしました。

こう書いていますと、その時のことが思い出され、足がうずき出します。次の休みにどこへ行こうか考えるのも楽しみの一つです。

祭員を務めるためには足腰がしっかりしていることが大切で、その鍛錬のためにも、少し速めに歩くことをお勧めします。少なくとも30分以上は歩いていただきたいものです。

芸術は宗教の母なり

～宗教即生活 芸術～



出口なお

王仁三郎の世界を語る

大本公開講座

大本芸術の原点

出口なお開祖は、極貧の生い立ちであったため学校に通えず、読み書きができませんでした。無学文盲の老女であった開祖が、明治25年（１８９２）の節分に神懸かりし、神が命じるままに書かれた（自動書記）のが『お筆先』です。それは27年間に渡り、半紙にして約20万枚にも及びました。

『お筆先』の特徴は、ほとんどが平仮名で書かれていることと、膨大な量にも関わらず、文字の大きさと筆圧が終始一定していることです。一見、拙い文字のようにも見受けられますが、『お筆先』の一文字一文字には一般の書とは違った、神的な雰囲気が漂っています。

開祖はいわゆる芸術作品というものを、世に残すことはありませんでしたが、『お筆先』から大本の芸術は始まったといえます。『お筆先』を大本芸術の原点と位置づけ、各地で開催している大本の作品展で展示しています。やはり大きな感動をもたらしているのが事実です。

煌めき耀く天国の茶盌

出口王仁三郎聖師は、第2次大本事件で6年8ヶ月もの間、拘留されます。その間、聖師は耀盌（ようわん）の構想を練ったそうです。昭和17年（１９４２）に釈放されると、もっぱら陶芸に没頭し茶盌を造りました。

その耀盌を名付けたのは、聖師ではありません。陶芸評論家の加藤義一郎氏です。聖師の「天国廿八（じゅうはち）」「御遊（ぎょゆう）」の2盌を目の当たりにし、これまで見たことのない色彩と姿に驚嘆し『日本美術工芸』誌で紹介したのです。聖師が昇天した後の、昭和24年（１９４９）のことでした。その時〝星のように煌めき耀く茶盌〟と形容され、はじめて耀盌が世に出たのです。

昭和20年、大本事件の無罪が確定します。しかし、日本が敗戦した混乱期ということもあり、それまで大本事件を大々的に取り上げていた新聞社やメディアのほとんどは、それを取り上げませんでした。そのため聖師は、逆賊や国賊のレッテルは貼られたままだったのです。それでも、聖師の茶盌に歓喜した加藤氏は、自身の風評を省みることなく耀盌を雑誌に紹介したのです。

聖師は〝天国〟がつく銘の耀盌を多く残しています。天国の様子をこの世に映し出し、みろくの世の実現を耀盌に凝縮し、芸術という形で顕（あらわ）したのではないかと思います。

作陶する出口王仁三郎聖師

講師 高木日出喜（たかぎひでき）
（大本楽天社事務局主幹）

耀盌、海を渡る

「芸術は、美をとおして、その奥にある真実を見る人の心の中に写します。芸術によっていまや欧州の精神に、歓びとともに、大本のみちのまことを、もっとも純粋に宿そうとしています」。

これは昭和47年、三代教主・出口直日がヨーロッパで開催された作品展にあたって信徒へ向けたあいさつ文です。

初の欧州展はパリのセルヌスキ美術館で行われました。東洋文化、とりわけ日本文化に造詣が深いバディム・エリセーエフ館長が、かつて日本で見た耀盌の美しさが忘れられなかったというのが発端でした。

海外作品展では、聖師の耀盌をはじめ、歴代教主・教主輔の茶盌、書画、屏風などが展示されました。なかには「いくらでもお金を用意するから譲ってほしい」という人も現れたそうです。

また、作品展の期間中は薄茶接待や書道のデモンストレーションなど、日本伝統芸術も紹介されました。当初はセルヌスキ美術館だけの予定でしたが、エリセーエフ館長の熱意と、パリで大好評を博したことから、その後、フランス国内4カ所とロンドン、オランダ、ベルギー、アメリカ、カナダの6カ国13会場へと開催が広がり、合計で約24万人の来場者を記録しました。

とくにニューヨークで作品展が開催された際に、作品展は質的な変化をもたらすことになります。

美から生まれた宗際化

―アメリカ―

質的な変化とは、ニューヨーク展の会場となった世界最大ゴシック建築である、キリスト教の聖ヨハネ大聖堂で大本式祭典による開催奉告祭が執り行われたことです。一神教であるキリスト教の教会で、他教の祭典が行われるというのは、人類史上はじめてのことでした。

また、祭典のみならず、イエス・キリストへの献茶と舞囃子（まいばやし）、仕舞、武道などが奉納され、このことが宗教同士をつなぐ宗際化の起源となったのです。

この作品展が終わり、2年後の昭和52年（１９７７）、アメリカ聖公会の司祭が大本に来苑し、今度は大本の聖地における合同の祭典につながることになります。

―日本―

その祭典が行われたのは大本の発祥の地である、京都府綾部市梅松苑のみろく殿という神殿です。ニューヨークでの祭典が、大本式（神道式）で進められたのに対し、みろく殿ではキリスト教の儀式に大本が加わる合同礼拝として執行されました。以来、この合同礼拝を重ねて行き、日本を中心に大きな影響を及ぼしていきます。

作品展から国や宗派を超えた宗教交流が実現したことはとても不思議なことです。

今日でも、いがみ合っている宗教は多く、平和を考える場合に、世界レベルで大きな障害になっていることは間違いありません。

これに対し、合同礼拝は宗教が国や民族など、それぞれの間にある障壁を取り外すことを目的とした実践であり、宗際化、ひいては世界平和を目指すという点で大変重要だったといえます。

世界平和を願う芸術的祭典

聖師は日本古来から伝わる歌祭を古式の精神にのっとり、昭和10年に復活再現しました。大本歌祭として毎年、聖地（京都府亀岡市）で執行されています。

歌祭とは、わたしたち日本民族の祖先が、遠く上代に執り行っていた神事であり、芸能でもあり、両者が渾然一体となった民族的祭典です。

歌祭では「八雲神歌」という、素戔嗚尊（すさのおのみこと）が詠まれた和歌「八雲立つ出雲八重垣つまごみに八重垣つくるその八重垣を」が詠われます。聖師は「八雲神歌」については「国々、人々の間にある、有形無形の障壁（八重垣）を取り払い、この歌をもって世界平和、人々の間に幸福を願う」と解説しています。

日本で最初の歌謡といわれる〝夷振調（ひなぶりちょう）〟で朗詠され、伴奏には弓太鼓と呼ばれる楽器を用います。この楽器は、素戔嗚尊が世を憂い、思いを巡らしている時に、妻神の櫛稲田姫（くしなだひめ）が、尊の心を和ませるために、桶にくくりつけた弓を打ち鳴らしたのが始まりといわれています。

歌祭で信徒は和歌を捧げます。この和歌は各人の真心を表したものであり、この歌を神に献じることによって、世の中の有形無形の障壁や、感情的なもつれが解けるよう祈念するのです。人群万類が和合して平和な世界の実現を願う祭典が歌祭です。

東京大本歌祭　平成２０年（２００８）

芸術の神髄

出口日出麿尊師は「神に通じる門戸」として3つあると示しています。1つ目は、善や愛から神を感じる、いわゆる宗教とか道徳と呼ばれるもの。2つ目は、真理や道理などで神を感じる、学問などを指します。3つ目が、美によって神を感じる入口で、これが芸術です。

例えば、花が咲いていて美しいと思う感情は、人種、性別、年齢、境遇、環境などに関係なく、変わらない普遍的なものです。したがって、美というものは全ての人に共通な感情であり、その奥の本体である神を感じ、神に至りうるというのです。

そして、大宇宙、大自然こそ神が創造した大芸術作品であり、そこに感謝の念を抱き、美しいと感情をあらわすことが、神を感じて生きる万人共通の道であると聖師は述べています。

近年、国内において『出口王仁三郎とその一門の作品展』が次々と、開催されています。入場者から「言葉が出ないほどの光のエネルギー」、「生命と自然への賛歌と畏敬に溢れた作品に感動」、「自分の人生が変わった」など、多くの反響が寄せられています。

単なる芸術作品を鑑賞、賛辞するだけでなく、芸術をとおして神を感じ、神という存在を意識することが、聖師が幾度となく伝えてきた〝芸術は宗教の母である〟という言葉の神髄なのです。

人は美を感じ、芸術をとおして神の御心を覚ることができます。信仰と芸術を生活の中で実践すると、心豊かな人生が送れると思います。

古今独歩「出口王仁三郎とその一門の作品展」（東京都北区）平成２５年（２０１３）

掲載文は、平成26年7月16日に航空会館（港区新橋）で開催した「大本公開講座」講演録の要旨です。

東光苑秋季祭式講習会

東光苑秋季祭式講習会は、9月27・28の両日に開催され、のべ36人が参加した。

受講者は、初級クラスが基本動作から正中動作・後取動作・祝詞展巻奏上・祓式行事・献饌・月次祭まで、中級クラスがそれに加え、大神鎮座祭・祖霊鎮祭・合祀祭・年祭までを実習した。

なお、初級と中級クラスの内、19人が大本祭式認定試験に臨み、2日間の実習の成果を試した。

期間中、基本をしっかり学んだ

東光苑月次祭

東光苑月次祭・市杵島姫命例祭は、10月12日、午前10時30分から、斎主・髙野春樹祭務課長のもと執行され、310人が参拝した。

祭員は関東教区直心会員、少年祭員は山梨主会の小池翔音くん、礼音さん兄妹、東京主会の涌井三四郎くん、伶人は宮咩会関東支部、大本神諭拝読は遠藤三智子・直心会埼玉連合会長、添釜は髙野社中がそれぞれ担当した。

祭典後、大本東京本部を代表して髙野春樹祭務課長があいさつにたち、昨今の国内における自然災害をどのように受けとめ、何をすべきかについて、「日々のご神書拝読・浄書をとおして、真剣に祈り、それぞれの役割を自覚し、継続した実践が肝要である」と述べた。

清々しく祭典にお仕えされた
直心会員と少年祭員の皆さん

引き続き「みろくの世への実践」と題して、小藪資史特派宣伝使が月次祭講話を行った。講話では、一人ひとりが、陰徳を積み地道に努力を重ねることが〝大和合〟を生み、神教宣布のご用に奉仕する礎となることを、お示しを紹介しながら述べた。

次いで、奉納行事が行われ、栃木主会の皆さんが、愛善歌『栄光』を奉納した。

なお、午後2時からは、関東教区主会長等連絡会が講座室で開催された。

大本公開講座

第140回大本公開講座『出口なお・王仁三郎の世界を語る2014』は、10月15日午後7時から港区新橋の航空会館で開催され、長友邦之・元生産組合皆農塾代表が「食が育てる命と霊性～今こそ、お土の心を～」と題して講演した。参加者は38人（内、一般12人）。

ユニークな体験談で笑いを誘った

講座では、自身の体験をふまえ、お土の恵みとその循環機能などをユニークに説き、お土には、人や動・植物本来の力を引き出す力があると結んだ。

参加者からは、「お土に対して新しい視点で理解することができた。（男性・一般）」等の声が寄せられた。

家庭平安祈願祭

今年で第23回目を迎えた家庭平安祈願祭は、10月18日午前10時30分から、斎主・髙野春樹祭務課長のもと執行され、67人が参拝した。

祭典では、斎主と祭員が全国から申し込まれた542世帯の世帯主名を全て読みあげ、家庭の平安と繁栄を祈念した。

祭典後、大本東京本部を代表して、猪子恒東京宣教センター次長があいさつにたち、「〈神さまのお許しのもと、人や家族の縁は結ばれている。その巡り合いに感謝すること。たとえ苦難があっても、よりよくなるためのものだ〉と示されている。明るく前向きに、日々の生業とご神業にお仕えしましょう」と信仰的な家庭のあり方を述べた。

斎主と祭員で申込世帯主名を奏上

なおご祈願は、10月25日までの一週間続けられた。

東光苑祭典・行事予定

11月

2日（日）午前10時30分執行
開教百二十二年大本開祖大祭遥拝祭

9日（日）午前10時30分執行
東光苑秋季大祭
新穀感謝祭・七五三詣り

15日（土）午前10時30分～午後4時
東光苑「葬祭研修会」

19日（水）午後7時～8時30分
大本公開講座（航空会館・港区新橋）
「出口なお・王仁三郎の世界を語る2014」
講題　人は何のために生きるのか
～万物に使命がある～
講師　猪子恒（東京宣教センター次長）

23日（日）
全国人型おすすめ活動日

12月

14日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・市杵島姫命例祭
全国人型おすすめ活動の日

16日（火）午前10時30分執行
開祖聖誕祭（178年）

17日（水）午後7時～8時30分
「出口なお・王仁三郎の世界を語る2014」
講題　真理の『幸せに生きる主義』
～宇宙の呼吸・宇宙のリズム～
講師　浅田秋彦（大本本部長）

25日（木）午前10時30分執行
尊師毎年祭（23年）